

★留学生便り (47) ★

ペテルブルグ留学

岡村 洋輔

いつ頃からか・・・、ラスコーニコフが「強欲な金貸し老婆なら殺してもいい」ということを考えながら歩いたネヴァ河の橋はどこだろう、ソーニヤの父親、九等官文官メラードフが馬車にはねられたのはネフスキー通りのどの辺りだろう、1917年10月革命の時レーニン率いる労、農、兵がなだれ込んだ冬宮の場所は今どうなっているだろう・・・等々想像と現実を織り交ぜたペテルブルグという街を自分の目でゆっくり見てみたいというバカなことを考えるようになっていました。それには、留学しかないと思うようになって聞いて合わせてみたらなんと72歳の老人でも受け入れてくれると聞いてバカなことに本気で乗り出してしまいました。

セントペテルブルグ大学のロシア語教室に入れてもらうことになって、クラス分けのテストの結果、下から2番目のレベルになったけれど一番下でなければ無理と思っていたので聞いてみたら空気がなかったみたいでした。クラスはハイスクール在学中の18歳から20代前半の大学生など12～3名全てが中国人ですが、担任の先生二人を含めて皆すごく親切に面倒を見てくれます。ゆっくり街の散歩などどころではなく膨大な宿題と予習、復習に追いまわされています。寝ている時も分けのわからないロシア語の単語が頭の中を五月蠅く飛び回っていてこの一月半ゆっくり寝られた日がありません。週5日毎日ロシア語の勉強だけをしているのだから次か

ら次へ新しいことを覚えなければならないのは当然ですが、如何せん記憶力、暗記力や視力の衰えは争いようもなく、クラスメイトや先生の温情にすがりながら必死で頑張っている状況です。

それにしても他のクラスも大半が若い中国人ではあるのですが、これだけ広くロシアの国立大学が門戸を開いているのに日本人がバカなことを考えた老人位しか見ないというのは何故なのでしょう。外務省から在留日本人向けにメールが届くようになって中身は危険地域情報だけで、国がとても本気でロシアの国と交流を深めたいと考えているようには思えません。

ペテルブルグの冬はもっと厳しいものと想像していたのですが、よく滑る凍った道と屋根から滑り落ちてくる氷やつららなどに気を付けていれば結構快適です。警察の人に危険だから、と怒られましたが、凍ったネバ川 (写真) を歩いて冬宮 (教室の対岸) まで渡ったときは冬にきて本当に良かったと思えました。滞在先の管理人さんに「明日は日曜日」と覚えたてのロシア語で言ったら満面笑みで「ウラー！」と言ってくれました。それではまた。



サハリン再訪

畔上 明

戦前の日本時代「旭ヶ丘」と呼ばれた頃から山スキーを楽しむ場となっていた「ゴールヌイ・ヴォーズドゥフ (山の空気)、その麓の林の中に奥床しく控えた「サンタ・リゾート」ホテルに宿泊してきました。

サンタクロースの故郷フィンランドのロヴァニエミにも同様の名のホテルがあることから、雪景色が映えるこのユージノ・サハリンスクのホテルも、「サンタクロース」の「サンタ」かと思われがちで、実際、ホテルの成立ち、由緒を知らぬリゾート客で3月も満室続きという盛況。

30年前このホテルのプロジェクトが立ち上がった時、私は「大陸トラベル」でサハリン旅行開発の事業に取り組んでおりました。ペレストロイカでソ連が大きく変わろうとした時期、日ソ合弁企業第一号として「イギルマ大陸」製材工場を完成させ成功に導いた「大陸貿易」が、合弁第二号としてサハリン船舶公園との間に「サハリン大陸 (サンタ)」を立ち上げ、ホテル建設を進めていた、その顧客開拓の為に旅行事業でした。

大型ショッピングモールに行けばあふれ返らんばかりの魅力的な商品に驚かされる現在のロシアの状況からは信じられぬほど、当時のソ連崩壊前夜は物がなく、サハリンも手のつけようのない自然を感じるばかりであり、樺太に戦後も残留を余儀なくされた300人の日本人と連絡を取り合った日本経済新聞社の小川敵一氏が中心となって「サハリン同胞一時帰国促進の会」の運動が始められた頃でもありました。

北原白秋「フレップ・トリップ」、三浦綾子「天北原野」、李恢成「サハリンへの旅」などを読んでイメージをふくらませ、1ヶ月かけて「サハリン船舶公園」のプリマコフ氏と共にヘリ



コプターでサハリンの南から北の果てまで巡りそこで撮影したビデオの上映会、変わりゆくソ連の姿を新聞に掲載してもらおう等、さらに某大学の探検部のボロナイ川カヌー下り、釣りやハンティングの相談、樺太から引揚げて来られた方々の望郷ツアーのアテンドなどをした思い出の日々が、

30年振りに甦ることになったのでした。

大陸貿易のサハリン事業に尽力した当時の専務が一昨年夏逝去され、そのご遺族が、ホテルそのものは係争により日本の手を離れてしまったものの、関係したロシア人の方々と交流はいつまでも続いたことから、お世話になったお礼に今年3月サハリンを訪れたいということで同行させて頂いたのでした。

故人のお人柄と情熱が如何にロシア人との深い友情を築き上げていたかは、その尽きることのない歓待ぶりに示されておりました。

今回の訪問のハイライトはユージノ・サハリンスクから車で1時間南下、オホーツク海の岸辺にたどり着いたところで、氷上をスノーモービルで走って40分、氷に穴をあけてコマイ、キュウリウオなど、一行4人で140匹釣上げ夕食に舌鼓を打ったことでした。

防寒靴から釣り道具、折畳椅子、弁当の黒パンに脂身、そして寒さ避けにウイスキーまで用意され、釣りをしていた足下の氷をロシア人特有の大胆さと茶目っ気でグラスに投げこみ振舞ってくれたときには、楽しさと幸福感に満たされたものでした。(「プロコ・エアサービス」シニア・アドバイザー)

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております